

## 特集

## 福祉大会と福祉作文



第31回

## 寒川町社会福祉大会

昨年11月23日(日)、福祉大会は無事に開催の運びとなりました。来場者780名という盛会の中、ダンス演技やテノール歌手によるコンサート等3部構成で行いました。第2部の表彰式は、地域活動への貢献や福祉作文の優秀作文など、本会から感謝の気持ちを伝える場となりました。ここでは表彰の方々を紹介します。

(順不同・敬称略)

## 法人設立30周年記念特別表彰

◇役員功労者  
鈴木修◇ボランティア功労者  
鈴木みさ子、樋口けい子、熊澤純恵

## ◇多額寄附者

国际ソロプロミスト寒川、河西工業福祉協議会

宇田川良一、藤沢賢一、河西工業株式会社

さがみ農業協同組合、宗教法人寒川神社、有限公司寒川製材所、寒川ロータリークラブ、

株式会社サンエーサンクス、ダイドービバ  
レッジサービス株式会社湘南営業所、日産工機株式会社

4 神奈川県社会福祉大会受賞者 (報告)  
高田有貴、安部久美子、祖父江弥生、佐藤律子、川端とも子、鈴木正、中山薰、橋本照美、松本恵美子、湯山久代

◇賛助会員功労者  
宇田川良一、藤沢賢一、河西工業株式会社1 表彰  
社会福祉功労者等の表彰・感謝

◇社会福祉功労者  
山薦紀一、小菅義雄、渡邊真三郎、米山高、安原久男、上長忠義、中瀬いきいきサロン運営委員会、佐々木久枝、露木實、永嶋京子

◇在宅高齢者介護者  
三浦慎吾、木下三重子

5 福祉作文  
◇小学生の部  
峯田優芽、大垣結香、金子陽向、田振美結、金子晃平、志村悠晴、高橋楓花、三浦すず、矢邊彩奈、湯田彩乃、渡邊康介、田賀千愛、道下春月、鈴木唯花、西川真昼、山本昂祐、大久保美和、石濱里実、村井桜実、安波雅人、山上結奈

◇中学生の部  
木立百音、齋藤優美、宮代真由、矢澤結、山上結奈

## 本年度の福祉作文の概要

原田和代、宮山カラオケ同好会、日産労連日産工機労働組合、安楽寺秋彼岸会参加者一同、ガールスカウト日本連盟神奈川県第45団、寒川町民生委員児童委員協議会、寒川キリスト教会、創陶会、カトリック茅ヶ崎教会バザー委員会

小・中学校の児童・生徒の皆さんを対象に毎年募集している福祉作文ですが、今年も多くの応募がありました。選考は大変難儀しましたが、応募作品の中から小学生21編、中学生5編の合計26編の優秀作文が選ばれました。次ページからその一部を紹介します。

## 小学生の部



お兄ちゃんとのおでかけ

・福祉大会発表  
・県福祉作文コンクール佳作

小谷小学校四年 金子 晃平

ぼくのお兄ちゃんは、ようご学校にかよう中  
学二年生です。生まれつきしようがいがあつて、  
一人で立つたり歩いたりすることができませ  
ん。学校では車いすに乗つていて、家族で出か  
ける時はバギーというベビーカーをすごく大き  
くした型のものに乗っています。

お兄ちゃんが一しょに出かける時は、まず後ろ  
のスペースが広い所に車を止めなければいけませ  
ん。駐車場に車いすマークがあつても、後ろに広  
いスペースがないとバギーの乗せおろしができま  
せん。車を止めてバギーをおろし、お兄ちゃんを  
乗せてい動します。い動先や建物の中では、段差  
や階段ではいけないので、エレベーターやスロー  
プをさがして上つたり下りたりします。エレベー  
ターやスロープがない所では、下で待つてあるか、  
パパとママでお兄ちゃんをだつこしてバギーを  
持つてい動します。通路がせまいところも通れな  
いので、広い所で待つています。

お兄ちゃんはおむつを使つています。おむつ  
を変える時も場所をさがさなければいけませ  
ん。ふつうのトイレには赤ちゃん用のおむつが  
えシートがありますが、お兄ちゃんは大きいの  
で使えません。かんいベットのついている身体

障害者用トイレがあればいいのですが、まだま  
だ少ないようです。  
ぼくは、お兄ちゃんと出かける時、大変だ  
なあつて思います。なぜなら、行く前から持  
物のしたくをしたり、行く場所を考えたりして  
いくのに、全部一しょには回れなかつたりする  
からです。買い物でさえいつも同じ所に行くこ  
とになつてしまします。

ぼくは、いつでもどこでもどこへでもお兄  
ちゃんと一緒に行けたらいいと思ひます。そ  
のためには、車いすの人たちがすごしやすい場  
所がたくさんできるといいなと思ひます。ぼく  
もお兄ちゃんの世話をするお母さんの手伝いや  
車いすの人たちの手助けが少しでもできるよう  
になりたいと思ひます。



これって福祉？

旭小学校六年 西川 真昼

私の家の近くに、介護付き有料老人ホームが  
あります。そこには、おじいちゃん、おばあちゃん  
がたくさん住んでいます。一人暮らしの人達  
ばかりで、それぞれ個室になつて部屋で生  
活していますが、たびたび救急車が来ます。サ  
イレンの音が近くまで聞こえてくると「また老  
人ホームの人かな」と胸がドキドキします。「た  
いた事がなればいいけど」と心の中で思ひ  
ます。比較的元気なお年寄りの人達は、ホーム  
の職員さんと何やら楽しげにお話しながら散歩

を楽しんでいます。私の家の前の角を曲がつて  
いくコースで、その先にあるお店で買物をして  
くるらしく、帰りにはレジ袋を下げてにこにこ  
して帰つて来ます。その様子を見ているだけで  
私の心も何故かホッとします。話の内容はよく  
分かりませんが、大抵はお年寄りの人が一方的  
に話していて、職員さんは「あ、そう。そうな  
んだ。」という風に聞き役になつていています。そ  
れまでその人が歩んできた人生の中でいっぱ  
い人に話したい事があるんだろうと思ひます  
が、家族と一緒に住んでいれば話し相手もいま  
すが、ホームに住んでいるとそうもいかないの  
でしょう。その為に、散歩に出ると一気に話が  
出るのだと思ひます。そう考えると、楽しそう  
に話している顔を見て私も私の心は何だか複雑で  
す。私の祖父母はすぐ近くに家があるのでいつ  
でも行けるし、お話もいっぱい出来ます。今ま  
でそれが当たり前の事だと思つていましたが、  
「そうじゃないんだ。」と気付きました。話した  
くても話せない、話を聞いてくれる人もいない。  
世の中にはそういう人達もいっぱいいる事を改  
めて考えさせられました。でも、「私に一体何  
が出来るの？」と思ひますが、いい考えが浮か  
びません。それだけ恵まれて今まで生きてこれ  
たんだなと父母や祖父母に感謝の気持ちで一杯  
です。今度散歩しているホームの人達を見かけ  
たら、私の方から挨拶をして話しかけてみよう  
と思います。きっと「こんにちは」ぐらいしか  
言えないんでしようが、何回か話しかけている  
内にいろんな話が出来るようになる気がしま  
す。勇気をもつてやつてみようと思ひます。

## 中学生の部



忘れないで、忘れないよ。  
・福祉大会発表

寒川中学校一年 木立 百音

私の家は二世帯住宅で、一階にひいおばあちゃんと祖父と祖母が住んでいます。二階には私達家族6人が住んでいます。

私のひいおばあちゃんは、今年で90歳になりました。おととし位から物忘れがひどくなつて、昨年は財布や通帳を何回も自分でどこかに隠して忘れて、その度に部屋中をみんなで探して大変でした。夜中にも起きてガタガタ探し物をするので、祖父や祖母も心配で眠れない日もあつたそうです。これはおかしいと思つて病院へ連れていくと、「認知症」と言されました。日本の高齢者の認知症が年々増えている事は問題になっています。認知症の薬をもらつて毎日飲んでいても、前のように元気に自分から何でもやるおばあちゃんには戻りません。いつもボッタとして何をするにも面倒くさいと言つて物忘れどんどん多くなつてきています。足腰が弱くなつてはいけないので、散歩に私と母で連れて行くと、「ここは、どこだか?道が分からなくなつた。」と言います。もし一人で出かけたら、家に帰つてこれなくなるかもしれません。全国で、認知症などの身元不明者が少なくとも169人いると新聞で読みました。自分の大事な家族が

家に帰つてこなくて行方がわからなくなつてしまつたら、心配でたまらないと思います。家のおばあちゃんがそうならない様に、祖母や母はいつも一緒に歩いて行きます。祖父と祖母は仕事をしていく間は家にいないので、週4回デイサービスに通える様になりました。はじめは嫌がつて「行きたくない。」と子供の様にだだをこねていましたが、祖母や母がいろいろ言葉をかけてやつと行くようになつて、そのうちに友達が出来たり、デイサービスの職員の人達が優しいので楽しくなつてきて自然に行ける様になりました。デイサービスでは手と足を使つて運動をしたり、指先を使って作品を作つたり、おばあちゃんの為の良い刺激になつてします。お風呂にも入れてもらつたり、足湯にも入つて喜んでいたのに、家に帰つてくると「お風呂なんて入つてない。何もしてない。」とみんな忘れてしまつてますが、毎日元気で過ごせるのは、たくさんの人にお世話になつて良くしてもらつてゐるおかげだと思います。デイサービスに行かない日は母がひいおばあちゃんの話しが相手になります。私も時々、時間ができた時に行きます。ひいおばあちゃんは同じ話を何度も何度もします。私は飽きてしまいますが、母は今聞いた話をまたおばあちゃんが話し始めても行きます。ひいおばあちゃんは同じ話を何度も何度もします。これから先、ひいおばあちゃんの認知症が進んで私の事を忘れてしまつても、私はおばあちゃんと二人で夜遅くまでベッドの中でおしゃべりした事、いつも私の事をほめてくれた事、優しく見守つてくれた事を忘れません。

そして、若い世代の私達は積極的に自分が出来る事は手伝い、高齢化社会についての問題もしっかり考えたいです。私は、これから今まで育てくれたたくさんの人に恩返しをするために、頑張つていこうと思います。

ひいおばあちゃんを温泉旅行に連れて行つた時の事です。お風呂でおばあちゃんは髪の毛を洗うと、次は体を洗つて、また髪の毛を洗つたことを忘れて髪の毛を洗います。教えてあげないといつまでも繰り返してしまいます。足腰も弱つて転びやすいので外を歩く時は足元に気をつけたあげたり、着替えも手伝えます。家族が世話をしないと出来ないと増えてきました。

お風呂の世話や、薬を欠かさず飲ませたり、身を取つてきているので大変だと思います。母もひいおばあちゃんを病院へ連れて行つたり、床屋さんや散歩に連れて行くのを手伝つています。祖父と祖母は70歳なので老老介護です。日本は、高齢化社会で、老老介護の家庭が増えていきます。介護疲れから家族が共倒れしたり、その事によつて悲しい事件もおきています。家族で頑張つても出来ない時は、福祉のサービスを利用して助けてもらう事も大事だと思います。

これから先、ひいおばあちゃんの認知症が進んで私の事を忘れてしまつても、私はおばあちゃんと二人で夜遅くまでベッドの中でおしゃべりした事、いつも私の事をほめてくれた事、優しく見守つてくれた事を忘れません。

ひいおばあちゃんも嬉しそうにニコニコ一生懸命話しています。おばあちゃんにとつては何回話しても、初めて話していると思つてゐるので「そなんだ〜すぐいね〜。」など、まるで初めで聞いたみたいに何度も聞いてあげています。ひいおばあちゃんも嬉しそうにニコニコ一生懸命話しています。おばあちゃんにとつては何回話しても、初めて話していると思つてゐるので「その話、もう何回も聞いたよ！」



「わが家の介護士から  
学んだこと」

・県福祉作文コンクール準優秀賞

旭が丘中学校三年 宮代 真由

私には介護福祉士として働く兄がいます。

兄が介護福祉士の仕事と出会ったのは、十九歳の就職活動をしている時です。

兄はもともと電車が好きで、JR東海道線の職員になりたかったそうです。もちろん、職員

になるために面接を受けに行きました。しかし採用されず、兄は夢を諦めました。

その後、兄は何かをきっかけに介護の仕事を見つけてきました。施設の見学に行つたのを始めとして、「働きたい」と思つたそうです。そのことを告げられた母は、自分の息子が介護だなんて、人様を介護できるのだろうか、という心配と抵抗があつたそうです。

資格も何もなしに就職した兄は、介護福祉士の国家試験を受けることにしました。勉強が得意ではない兄が机に向かっている姿はとても新鮮でした。毎日毎日、夜遅くまで起きて勉強をしていて、仕事も朝早くからあるのにすごいな、と思つていました。

兄は仕事から帰つてくると、「ただいま。お母さん、今日の夕飯何?」「疲れた。お風呂入つて来る。」のどちらかを必ず言つっていました。ご飯を済ませたら勉強。その繰り返しで、どうしてそんなに頑張れるのだろうかと思つています。

した。そんな兄の姿を見ていた私や母は、「合格できるといいな。」と願うばかりでした。国家試験の合否発表の日、兄から母に電話がきました。結果は不合格でした。

それから一年後、兄は二度目の挑戦をしました。前回、兄は友達と一緒に試験を受けていて、その友達は合格だったので悔しかつたんだなと改めて思いました。今度こそ受かると信じて受験しました。しかし、残念ながらまた不合格でした。

私は、国家試験の難しさに気づかされました。それからまた一年後、兄は三度目の正直と、もう一度、国家試験に挑みました。前回も、前々回の時も、合否がわかると母に連絡が来ていたのに連絡が来ませんでした。私も母も、心の中で「今回もダメだったか。」という思いが高まつていました。

母は、兄が帰つて来ても何も聞かずに、いつものように振る舞つていました。私は、そんな母を見たとき、親つてすごいなと思いました。

その日、家族で夕飯を食べているときに、兄が「合格したよ。」と言いました。突然言つたので、家族みんなが驚きました。口には出しませんでしたが、私は心の中で「お兄ちゃん本当にお疲れ様」と思つたことを今でも覚えていました。

最近テレビや新聞で「福祉」という言葉を多く耳にするようになりました。私の中で、福祉というものはとても身近にあるものなのではなかると考えます。少子高齢化が進んでいる今の日本を生きる私達は目を逸らしてはいけないとだと思います。

自分には関係ないとthoughtいても、人間は年を取る生き物です。自分が年老いたときに助けてくれるのは、周りにいる人達です。介護が必要になつたときに助けてくれるのは、周りにいる人達や介護士の人達です。

私の兄もその介護士の一人です。私はどうして、そんなに介護士として頑張れるのだろうかと、兄に対しても疑問に思つていました。けど、少し自分で気づけたように思います。

理解することや、気づくことが出来なくとも、一人でも多くの人が周りの人のことについていく社会を作つていくことが、一番大事なので、家族みんなが驚きました。口には出しませんでしたが、私は心の中で「お兄ちゃん本当にお疲れ様」と思つたことを今でも覚えていました。

今、介護の手を多く必要としている日本で、介護士の一人として働いている兄を尊敬しています。福祉に対して考えるきっかけにもなりました。私はこのことを通して、自分の手で何か、社会に役に立つ仕事を兄のようにしたいと思いました。